

祇園祭の重力

4 班メンバー

久保 文乃 (京都大学農学部 3 回生) 橋本 龍弥 (株式会社 業務渡航センター) 星山 董 (京都造形芸術大学キャラクターデザイン学科 2 回生)
松井 惇 (大阪大学外国語学部 4 回生) 南口 健 (京都信用金庫)

テーマの背景・目的

■ このことを調査しようと思った理由

祇園祭がこれほど長い期間続いてきた要因として、心理的に惹かれるもの(重力)の存在が大きいのではないかと考えられるため。

■ このテーマで調査する具体的な内容及び目的

祇園祭が 1150 年も続いてきてこれからも続いていくのにはどのような心理的な理由があるのか、祇園祭に欠かすことのできない神輿と山鉾の運営者がどのような思いで携わっているのかを調査する。

調査方法

■ インタビュー調査

6 月 18 日 占出山保存会
6 月 29 日 三若神輿会

■ 文献調査

・脇田晴子『中世京都と祇園祭一厄神と都市の生活』中公新書
・アリカ、新潮社編『祇園祭—その魅力のすべて』新潮社

内容・結果

以前は、神事であることから神輿側の言い分が最優先だったが、近年は、時代・価値観の変化から周辺住民や観光客への配慮が不可欠になった。

・ 昇き手の変化

神輿：農民・木材運搬者から、営業の特権を得た商人、地縁・人縁のある人へ

山鉾：地域ごとの役割分担から、地域外からの協力へ(人手不足により地域内での運営が困難となった)

考察

■ 変化したところ

- ・ 時代の変化と観光客の増加により、安全への配慮が不可欠になった(負荷要素)
観光客が楽しめるようにという意識をもつようになった(超回復)
- ・ 昇き手の変化から、商売のため、伝統を守るためなど動機に変化がみられる
- ・ 祭りに携わる権利の質が、営業の特権に付随する義務から誇りやプライドを感じさせるものとなった

■ 変化しなかったところ

- ・ 祇園祭で渡御する(神輿を昇いてまわる)こと、山鉾を出すこと
- ・ 上記のことへのある種の義務感

提言

■ SDGs と私たちのテーマの関連



11 住み続けられるまちづくりを
11.4 世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する。
安全で強靱な都市の実現に向けた開発を行いながらも、土着の文化や自然を大切にするという SDGs の概念と観光地化や価値観の変容など大きな変化がありながらも、柔軟に対応し伝統文化を維持する祇園祭の間に通ずるものを感じた。

■ SDGs にはないが大事なこと・祇園祭の重力とは

時代によって動機の変化はあるものの、使命感と義務感は変わらず感じられている思いである。

現代では、それに加えてやりがいや楽しさも重視されているように感じる。持続可能な社会の実現においても、続けていきたいという気持ちをいかにもってもらおうかが重要ではないか。

成果を実感できる機会や、自分本位ではなく他人や次世代のためという意識をもつこともやりがいや続ける励みにつながるのではないかと。

